

第1講座 小論文の基礎知識

小論文を書くための三つの条件

私たちが自分の考えや思いを外部に表明するとき、それは通常「ことば」を介して行われます。ここでいう「ことば」とは、日常の会話をはじめとして、新聞、雑誌、書籍、テレビ、ラジオ、インターネットといった情報伝達媒体 狭義のメディア で使用される音声や文章のことを指します。「ことば」なしで思想や意見を他人に伝えることは非常に困難でしょう。“以心伝心”が通用する相手は限定されるものです。

機能面だけを見れば、「ことば」は思想や意見を表明するための道具にすぎません。けれども、それは人間の思想や行動そのものに影響を与えるものでもあります。私たちは知識・情報を「ことば」として摂取し、内面に蓄積させます。そして、それによって自己の考えをまとめ、判断を下しています。

文章を書くことは、「ことば」を用いて思想や意見を伝えるための手段です。裏を返せば、伝えたいことがない人は文章を書くこともできません。伝えたいことを持つためには、「ことば」の形で知識を蓄積させるという前準備が必要となります。外部から得た知識・情報も、また外部に伝えたい思想や意見も、「ことば」の形式でしか個人の精神に定着しないものなのです。

ですから、小論文を書く準備として第一番目に必要なことは、日頃から「ことば」を意識して摂取することです。言い換えれば、書くための“ネタ”を蓄えることです。情報化社会と呼ばれる現代、「ことば」を摂取するための手段は数多くあります。関心を持ったニュースがあれば、それについての自分の意見や感想をメモしていくことが「ことば」を自分のものにするための第一歩となります。

小論文の練習法の一つに、論理的な文章を精読して文体の特徴や語句の選び方や論理展開のプロセスを真似してみる方法があります。高度な専門書や学術論文を読む必要はありませんが、関心のある分野について書かれた入門書・啓蒙書を読んでみましょう。すると、その分野に関する知識を得ると同時に、語彙力をつけることもできるはずです。

また、少々古臭い方法ですが、新聞社説を利用するという方法もあります。かつては、一般紙の社説を決まった字数で要約することが重宝された時代もありました。安上がりで簡便な手段ですが、新聞社説はそれほど論理的ではない上、悪文がまかり通っていることも多いので、最近はずっかり廃れてしまいました。社説を利用する場合は、決まった一紙を読むよりも、同一テーマについて論じた複数の新聞社説を比較して読む方法をお勧めします。論争的なテーマの場合、往々にしてライバル紙が正反対の論陣を張ることがありますが、そうしたケースにおいて双方の主張の違いを読み取るわけです。同じテーマでも立場によってまったく違う主張ができることがおわかりになるでしょう。

たいていの受験生にとって、論理的な文章は読みにくいものようです。特に国語や小論文などの入試問題で使われる文章の場合、文中に登場する語句や表現が難解なことに加えて、内容への興味や関心が薄いからだと思われます。漢字の読み方や語意の把握でつまづかなければ、どんな文章でも大意の把握はできます。興味をひかれるテーマについて書かれた文章なら、前後関係から意味を類推することも可能でしょう。けれども、興味のないテーマや概要をよく知らないテーマの場合、予備知識が乏しいこともあって、意味の類推が困難です。結果、単に文章の字面を追うだけで、内容はさっぱりわからない、という事態になってしまいがちです。無関心なテーマについては、読んだり考えさせられたりすること

自体が苦痛なものです。

そこで、小論文に取り組む上で二番目に大切なことは、どんな課題が提示されても即応できる準備をしておく、ということになります。つまり、日常からあらゆる事象に対して問題意識を持つことです。現代社会で起きているさまざまな事件や現象に関心を持ち、それに対して「なぜ」「どうして」といった素朴な疑問を投げかけながら、同時に自分なりの解答を探していきましょう。そうしたものの見方・考え方が、答案作成に役立つケースは少なくありません。

出題が予想される分野からテーマをいくつか用意して、このテーマならこんな内容を書けばよい、という答案見本を作っておくのは有効な方法です。作った見本が本番でそのまま使える確率は決して高くありませんが、いくつかの話題に関して解答の見本作りを練習しておく、と、予想外のテーマにぶつかった時でさえ、適切な内容の文章を書くことができるものです。これは、見本作りの過程で論理的な文章の基本パターンが体得できるからです。

三番目に大切なことは、実用文を書くための技術を知ることです。どんな文章にも必ず読者がいます。手紙や小論文のような実用の文章を書く場合、読者の存在を意識して文章を書く必要があります。通信添削講座に送られてくる答案を読むと、小論文の体裁をなしていないどころか、日本語として成立していないものが少なくありません。日常生活で正確な日本語を読み書きする頻度が低下しているからなのでしょう。何を言おうとしているのかわからない奇怪な文章を書く人さえいます。第三者に読ませる文章は、内容の良し悪し以前に、読みやすく正確な文章を書くことが大切です。

まずは文章を書く際のルールを身につけることから、学んでいくことにしましょう。

文章を書く際に注意すべきこと

文章を書くときは、自分（つまり受験生）が表現したい内容や意図した事柄内容が、正しく読者（つまり採点者）に伝わるよう心がけることが肝心です。正確な日本語文法・日本語表記法にのっとりた記述をしないと確実に減点されます。たとえば、主語と述語を正しく対応させること、修飾語と被修飾語の係り受けが適切であること、接続語や指示語の用法が的確かつ必然性があること、などは守るべき最低限のルールといえます。

ところが、大部分の答案がこれら文法上の誤りを抱えています。内容を評価される以前の段階で致命的減点を受ける場合もあります。発想や着眼点がいかによらしくても、それを伝える文章が読みにくくては、正当な評価は得られません。読みやすい文章表記をするためにも、まずは以下の事項に留意して記述するようにしましょう。

可読性

文章の読みやすさを可読性と呼びます。可読性は、文の長さや漢字・かな文字の交じりあい方、句読点の数などで決まります。漢字だらけの文章は息が詰まりますし、かな文字ばかりの文章もかえって読みにくくなります。

文にはちょうど読みやすい適切な長さや漢字の量、読点の数があります。可読性をいかに高めるかが、小論文のような実用の文章を書く場合にもっとも気を配らねばならない要素です。

文の長さ

一文をあまり長くしてはなりません。長くなればなるほど文は読みにくくなります。主語と述語が離

れすぎたり、修飾・被修飾の関係が複雑になったりして、文の構造が把握しにくくなるからです。一般に一文の長さは40~50字程度が読みやすいとされます。どんなに長くても、一文あたり80字程度までには抑えたいところです。

実際には文字数の多い単語（たとえば「インフォームド・コンセント」は13文字）を含むことで80字を超えるケースもありますが、あくまで目安は最大80字と考えておいてください。まれに200字以上の超長文にお目にかかることがあります。大減点は必至です。必然性のない長文記述は避けましょう。

読点の量

読点の打ち方がわからない、と嘆く人は少なくありません。もちろん、読点の打ち方には一定のルールがあって、いわゆる“文章の書き方”の本を読むと必ずといっていいほど読点の打ち方を説明した項があります。ただ、そのルールは非常に多岐にわたっていて、なかなか憶えきれるものではありません。

端的に言えば、読点はできるだけ少なく打つようにしましょう。読点を打ちすぎると、かえって文が読みにくくなることもあるからです。まずはできるだけ読点を打たずに書き、ここで打たないと意味を間違えて読まれそうな位置や、音読するとしたらこの辺で息継ぎしたくなる場所に、必要最小限の数を打てばよいのです。

読みやすい字で書く

小論文答案が他人に読まれることを前提とした文章である以上、第三者にとって読みやすい字で書くことは当然の配慮です。ペン習字のお手本のような上手さは要求しませんが、はっきりと読める丁寧な字で書きましょう。

筆圧が弱くて字が薄かったり、あるいは反対に鉛筆が濃すぎて答案が汚れていたり、殴り書きのような乱暴な文字だったり、原稿用紙のマス目をはみ出したりした答案は、それだけで不合格とされても仕方がありません。

漢字の表記

小論文の場合、使用する漢字とかなとの割合は3：7がちょうどよいといわれます。漢字の量を増やすと文体が硬くなるため、好んで漢字を多用する人もいますが、小論文答案では漢字の使用にこだわる必要はありません。

漢字を用いない方がよい語もあります。接続詞（「例えば」「たとえば」「又」「また」）や形式名詞（「という事」「ということ」「～する為」「～するため」）などは原則としてかな書きです。

いうまでもないことですが、誤字・脱字・送りがなの誤りは容赦なく減点されます。

記号類の使用

原則として句読点の“、。”、カギカッコの“「」”以外の記号は使わないようにします。

二重カギカッコ“『』”、丸カッコ“（）”、ダッシュ“—”、リーダ“……”も許容されていますが、必然性がある時に限られます。多用は望ましくありません。

また、“％”（パーセント）や“\$”（ドル）、“m”（メートル）などの単位記号、“+”（プラス）や“=”（イコール）などの算術記号などは、縦書き時にはカタカナで表記します（横書き時にもカタカナ表記がかまわない）。

その他、「々」以外の踊り字の使用や、常用漢字外の略字使用なども減点対象です（ただし、固有名詞は除く）。

